

J Aによる地域を元気にする素敵なお話。

ふるさとの育む人 #39「横手黒毛和牛」



育む人 ひろゆき 橋本 紘志さん 山内地区 33歳
生産品目：繁殖牛29頭、育成牛20頭

横手の新たな和牛ブランド「横手黒毛和牛」

緑豊かな山内地区の一角に立ち並ぶハウス式の牛舎。その中では、健やかに成長した黒毛和牛の生産が行われています。横手で生まれ育った「横手黒毛和牛」は、JA秋田ふるさと和牛部会36人のうち6人の肥育農家が出荷するブランド牛。同部会と横手市内の食肉卸業者が2009年から販売促進に取り組み、その知名度は年々高まっています。



史学を学んだ大学時代に就農を決意

山内地区の橋本紘志さんは、農業の高齢化が進む中、若き担い手として就農し、現在8年目。子牛を出産させて繁殖させるために飼育する「繁殖牛」を29頭、生まれた子牛を成牛まで育てる「育成牛」20頭を管理し、横手黒毛和牛の生産の一翼を担っています。

畜産農家に生まれた紘志さんは、祖父の代から受け継ぎ3代目。就農を志したのは、史学を学んでいた大学生のときでした。当時、国内ではBSE(狂牛病)問題が発生。しかし、大きな影響を受けながらも懸命に頑張る父の一志さんの姿を見て、「家業を手伝うことで経営を底上げしたい気持ちが強くなった」と、紘志さんは当時を振り返ります。



家族の強い連携で肉用牛を一貫経営

大学卒業後は1年間、父の傍らで畜産の大まかな流れを学び、その後は県の畜産試験場で研修を受講。「家畜人工授精師」と「受精卵移植師」の国家資格を取得したほか、県内外の先進農家などを見学し、肉用牛の生産に関する技術を習得しました。当時から子牛の価格が上昇していたことから、「優秀な子牛を生産すれば肥育(肉用牛)の成績も上がり、所得向上につながる」と一念発起。一志さんと弟の健司さんが取り組む肥育部門と、紘志さんの繁殖部門という肉用牛の一環経営として取り組んできました。



全ては、良い牛を育むために

責任を明確にするために、家族間で経営を分離。肥育部門では、紘志さんが生産した子牛を市場から買い取って肥育し、預託を含め200頭にも上る肥育牛の中からは、県内の競技会でチャンピオン賞を獲得するなど、優秀な牛を多数生産しています。「安全安心な精肉を届けることが私たちの使命」と謙虚に語る紘志さん。たくましく成長する牛たちを愛でるそのまなざしからは、明日の畜産を担う強い意気込みが感じられます。



左から紘志さん、一志さん、健司さん